

前回、この使徒の働きからメッセージが語れたのが、今月の2日でしたから、4週間ほど間が空いたことになります。記憶を呼び覚ますために、前回開いた箇所最後の部分を見たいと思います。ユダヤの指導者たちに再び捕らえられた使徒たちが、彼らに向かって語っているところです。

29-32節「ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。『人に従うより、神に従うべきです。30 私たちの父祖たちの神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。31 そして神は、イスラエルに悔い改めと罪の赦しを与えるために、このイエスを君とし、救い主として、ご自分の右に上げられました。32 私たちはそのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です』」。

このことばを聞いた指導者たちは、怒り狂い、使徒たちを殺そうと計りました。それが今日の33節のところからです。その状況をイメージするなら、とても緊迫したものであったことがわかります。そのままの流れで行くなら、弟子たちはその場で殺されていてもおかしくないといった状況です。ところが、その怒り狂う指導者たちの中に、この一連の出来事を冷静に見ている人がいました。ガマリエルという人物です。

34節「ところが、すべての人に尊敬されている律法学者で、ガマリエルというパリサイ人が議会の中に立ち、使徒たちをしばらく外に出させるように命じた」。使徒たちに対してねたみに燃えたのは、大祭司とその仲間たち、つまり、サドカイ派の人々であったことを以前見ましたが、このガマリエルという人は、彼らとは違ってパリサイ派の人でした。サウロ（後の使徒パウロ）の先生でもあった人です。この人は、律法の教師であり、すべての人に尊敬されている指導者でした。そんな彼が、議会で立ち上がり、こう語ったのです。

35-39節「イスラエルの皆さん。この人々をどう扱うか、よく気をつけてください。36 というのは、先ごろチュダが立ち上がって、自分を何か偉い者のように言い、彼に従った男の数が四百人ほどありましたが、結局、彼は殺され、従った者はみな散らされて、あとかたもなくなりました。37 その後、人口調査のとき、ガリラヤ人ユダが立ち上がり、民衆をそそのかして反乱を起こしましたが、自分は滅び、従った者たちもみな散らされてしまいました。38 そこで今、あなたがたに申したいのです。あの人たちから手を引き、放っておきなさい。もし、その計画や行動が人から出たものならば、自滅してしまうでしょう。39 しかし、もし神から出たものならば、あなたがたには彼らを滅ぼすことはできないでしょう。もしかすれば、あなたがたは神に敵対する者になってしまいます。」…

使徒たちに対して怒り狂い、殺す気満々の他の指導者たちに対して、ガマリエルは何と語っていますか？読んでそのままなわけですが、つまり、「使徒たちから手を引き、放っておきなさい」と彼は言うのです。それはなぜですか？彼もまた、使徒たちの仲間だったからですか？いいえ。ガマリエルがこう語った理由、それは、使徒たちと彼らの行っていることが、彼ら自身、つまり、人から出たものではなく、もしかしたら、神様から出たものかも知れないと考えたからです。

この時点で、他の指導者は、使徒たちと彼らが宣べ伝えている主イエス・キリストは、神からではなく、人から出たものだと結論付けていました。いや、最初からそう決めつけていたと言った方が良いでしょう。でも、確かに彼らも見たのです。使徒たちによって福音が大胆に語られ、また不思議なわざとするしが彼らを通して行われたことを。そして、それを体験した人々がみな、神様をあがめているのを彼らは知っていました。

ところが、ねたみと怒りゆえに、彼らはガマリエルが見るようには、その状況を見ることはできませんでした。自分たちこそ神に選ばれた者、神から権力を与えられ、民の指導者として立てられたと自負していたからです。そのように自分たちを何か偉い者だと思ふ彼らのプライドが、目の前で行われている神のみわざを見えないようにさせていました。そこにガマリエルが立ち、使徒たちから手を引くことを提案したのです。

指導者たちを説得するにあたり、ガマリエルは、チュダとガリラヤ人ユダという人の反乱を例にあげ、彼らの結末が自滅であったことを説明しています。その理由は、彼らの計画と行動が、神からではなく、人から出たものだったからだと言うのです。では、使徒たちについてはどうか？というと、それに対しては彼は自分の意

見を語っていません。ただ、もしそれも人から出たものならば自滅する。でも、もし神様から出たものであるならば、人にはそれを滅ぼすことはできないというのです。ですから、彼らから手を引くようにと指導者たちを諭し、そうでないと「もしかすれば、あなたがたは神に敵対する者になってしまいます」と警告を与えています。

人はみな、自分は正しく、自分の意見はすばらしいと思うものです。だからといって、本当に正しく、すばらしいわけではないのですが、そうってしまうのが私たち人間の愚かな所です。ですから、そういう部分があることをいつでも心に留めておかななくてははいけません。もしかしたら、自分は間違っているかも知れない。もっとすばらしい意見があるかも知れないと。特に、ねたみや怒りがある時には、注意を深めたいと思います。そうでないと、神様のためと言いながら、神様に敵対することさえしてしまう可能性が大いにあるからです。

ガマリエルに説得された指導者たちは、この後、使徒たちを釈放します。でも、さっきまで怒り狂い、殺ろうとしていた人たちが、何もせずに彼らを釈放するはずがありません。40節「使徒たちを呼んで、彼らをむちで打ち、イエスの名によって語ってはならないと言い渡したうえで釈放した」。ガマリエルの手前、彼らは使徒たちを釈放しました。でも、彼らの中では、使徒たちもまたチュダやガリラヤ人ユダと同様、人から出たものであると確信していたのでしょう。そうでなければ、むちで打つことはしなかったはずですが。

でも驚くべきは、その指導者たちの頑なさよりも、釈放された時の使徒たちではないでしょうか？41節「そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った」。使徒たちのうちには喜びがあったといいます。指導者たちも彼らの様子を見たと思うのですが、使徒たちはいったい何を喜んだのでしょうか？彼らは釈放されることを喜んだのですか？いいえ。自分たちが御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜んだのです。

皆さん、もしあなたが使徒たちと同じような目に遭ったとして、あなたも彼らのように喜べると思いますか？普通なら、自分を酷い目にあわす人に対して、怒り、憎しみ、敵意、復讐心などを抱くのではないのでしょうか？なぜわからないんだと言って、主を拒み続ける人に向かって、苛立ちを覚えるのではないのでしょうか？議会から出る時、使徒たちはその打ち傷のゆえに痛みを覚えたと思うのです。でも、彼らは喜びました。

主イエスに対する使徒たちのそのような思い、信仰は、どこから来たのでしょうか？それは彼ら自身から出たものですか？彼らは、自分の正しさや強さにより頼むことで、指導者たちの手前、無理に喜んだ、つまり、そこで喜んでいるふりをしたのでしょうか？いいえ。彼らは、自分たちが主のためにはずかしめられるに値する者とされたことを本気で喜びました。それが神様から出たことであったからです。

もっと言うと、彼ら自身が、主によって神様から出た者、聖霊によって生まれた者であったゆえに、彼らはそのことを喜びました。自分たちが信頼し、望みを置いている主イエスのすばらしさを彼らが知っていたからです。ですから、彼らをして御名のため、すばらしい主のためにはずかしめを受けることは、主と同じ側に立つことの証拠、つまり、主と一つにされていることであるゆえに、彼らはそれを喜びました。主イエスとのその親密な関係が、この方のために受ける苦しみよりも勝ったと言えるでしょう。

主は言われました。ルカ 9:26「もしだれでも、わたしとわたしのことばとを恥と思うなら、人の子も、自分と父と聖なる御使いとの栄光を帯びて来るときには、そのような人のことを恥とします」。主と主のことばを恥と思う人とは、どういう人でしょうか？主を受け入れない人、信じない人がそうでしょうか。でも、もしその人たちだけを指しているなら、あえていう必要はなかったと思います。主が言われたのは、外側は、主を信じているよう、信仰者のようでも、実は主を知らない人、主を愛していない人のことではないのでしょうか？

そのような人は、主から何か受けることは求めるかも知れません。でも、主ご自身は求めない。それゆえに、主と主のことばを心から信じることをしないので、自分の都合や状況が悪くなると、主と主のことばを恥とする。つまり、それに聞き従うことをしないのです。でも、主ご自身を求める人、主を知ろうと切に願う人は、みことばと聖霊を通して主を知るようになります。そのような人に主がご自身をわからせて下さるからです。

そのようにして主イエスという方を知っていくなら、主のすばらしさに対して、また同時に、罪人としての自分の姿に対して私たちの目は開かれるようになっていきます。では、そのどこに良い点があるのでしょうか？[ロマ5:20](#)にこうあります。「罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました」。みことばと聖霊を通して主イエスを知り、また自分の罪深さを知らされるなら、私たちは主の十字架の意味を本当の意味で知るようになります。

つまり、主が十字架の死を通して与えてくださった赦しが、その恵みがいかに大きいものであるかを私たちは知るようになるのです。そうすると、私たちのうちで十字架のことばは、もはや愚かなものではなく、それは神の力となります。小さなものではなく、すべてとなるのです。「神の御子が、こんな罪人の私のためにいのちを捨てて、神のさばきを代わりに受けて下さったなんてありえない」と、主の成し遂げられた救いのわざに驚きと感動を覚えずにはおられなくなります。

そうすると、この恵みを受けることが、当然のことではなく、むしろ、自分はそれを受けるに本当に値しない者であることがわかるようになるのです。使徒たちが、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜んだのは、そのように主イエスとその恵みのすばらしさを知るところからであったのではないのでしょうか。続く[42節](#)も、そのことを証していると思います。「そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた」。

釈放された使徒たちは、その後も、毎日、指導者たちのいる宮で、また家々で、イエスがキリストであることを教え、また宣べ伝え続けました。英語では「教えることと宣べ伝えることを止めなかった」と表現しています。「止めなかった」ということは、「続けた」ということですが、なぜ彼らは「イエスの名によって語ってはならない」と命じられても、それを止めなかったのですか？イエスがキリストであるという確信を彼らがうちにもっていたからです。

皆さん、あなたはどうですか？あなたのうちにも同じ確信がありますか？もしあるならば、それを他の人に伝えずにはおられないのではないのでしょうか？「この方の他に救いはない」と本気で信じるなら、そのことを知らない人に黙っておられますか？主イエスを知る時、私たちのうちにはこの世のいかなる問題や苦しみにも勝る喜びが、聖霊を通して与えられます。私たちはそれを自分でつくり出すことはできません。でも、主ご自身を求める者に、主はみことばと聖霊を通してご自身を現し、私たちをご自分の喜びで満たして下さいます。その主の喜びが、苦難の中にも、それを乗り越えて、私たちを宣教へと向かわせるのです。